

自らを低くして

「ペテロの第一の手紙」5章6～11節までを朗読。

6節「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう」。

6節に「だから」と始められています。これはすぐ前の言葉を受けてのことです。5節に「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。また、みな互に謙遜を身につけなさい。神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである」とあります。神様が恵んで下さるのは、へりくだる者に対してであると。また「高ぶる者をしりぞけ」とあります。

高ぶる者、へりくだる者、高慢なる者、謙遜な者とありますが、高ぶるとはどういう事でしょうか。これは自分を高くすることです。言い換えると、自分の力や何かを誇る、あるいは自分の思いや考えこそが、一番よいものであると、それにしがみつく、その思いから離れられない。自分を有能な者、力ある者であるかのように思う。あるいは自分の考えている事こそが一番良いのだと思う。そういう人を、神様はしりぞけられるのです。なぜならば、神様の恵みをいただくには、私たちがへりくだる、謙遜になるほかありません。高慢な人は、神様の恵みを、あればあったでよし、なければなくてもよしと、どっちでもいいという人です。神

様も、それなら勝手にやったらどうだと、自分でやればいいじゃないかとなります。どうしても助けてほしい時は、恥も外聞もかなぐり捨てて、求めていくしかないわけです。人と人との間でも同じです。余裕がある、頼んでは見るけれども、ダメだったらダメでいいという人に対して、誰だって真剣に相手にしようとはしません。ところが、あなた以外に頼るべき方はありませんと、裸になって、投げ出して縋りつかれるなら、いくら力のない者であっても、なんとかしないとイケないと思います。

神様も同じです。神様からの恵みをいただく、神様から力をいただくには、徹底して自分を低くすることです。神様の前に、徹底して、むなしくなる。自分をゼロにしてしまわないと、神様からの祝福と恵みを受けることができない。へりくだる者とは、謙遜な者ということです。ところが、案外と謙遜になることが難しい。自分を卑下するのとは違います。よくそういう方がいらっしゃいます。「先生、そんなことできません。そんな、私は力がありません」と、盛んにすべてを否定する。それが謙遜な人の姿だと間違えているのです。謙遜な者とは、すべて自分の力によるものではない、神様によらなければどうにもならないという人のことです。

だから、高ぶる者とへりくだる者の大きな違いは、何としても神様によらなけ

ればならないと思う人と、神様がいらっしやるとしても、私は私でやります、時に、神様、助けて下さいという、そういう事であるならば、神様は、それなら自分でやったらどうかと、手を引かれるに違いない。ここが大きな違いですね。へりくだるとは、自分は何もできない者で、「神様、あなたによらなければできません」というところに立つことです。私たちは、どんなことでも自分の力ではできないし、自分の考えていることが正しいとはどうしても思えない。「神様、あなたが知恵を与えて、あなたのみこころを教えて下さらなければ、私は正しく歩むことができません」と、神様の前にへりくだる、謙遜になる。これが大きな祝福を受ける道筋であります。

6節「あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい」と。神様の力強い御手の下に自らを低くするとは、まさにへりくだる、謙遜になることです。言い換えますと、どんなことにも神様の絶大な、力ある御手がそこにあることを認めるのです。日々、出会う様々な出来事の中で、理不尽な事、なんでこんな事になったのかとわけが分からない、理屈では分からない事態や事柄、また自分がどうしてこんな目にあわなければならないと思うような事態にある時、どうしてこんな目にあうのでしょうかと、不平不満を持ち、つぶやく思いが出てくる時、その人は言うならば高ぶった者であります。「え、そうかしら」と思われる。なぜなら、そもそも私がこんな目にあうはずがないのに、どうしてこんなことになっ

たのだろうか、理不尽な、私の何がいけなくて、こうなったんでしょうかと、怒りが心にある。これは高慢なる者であります。高ぶる者であります。大能の御手の下に自らを低くするとは、たとえその事態、事柄が、自分にとって、都合の良い事であろうと悪かろうと、そのことの中に、神様の御手が働いて、そこにわざをすすめておられるのだと認め、与えられたものを感謝して受けるようになること、これがへりくだる者であります。また、それが力強い御手の下に、自らを低くする。

だから、生活のどんなことも、神様のみこころによらないことは何一つない。聖書にはそう語られています。この世に命を受けて、生きる者とされて、地上の人生、いろいろな事の中を通過してきました。そのどんなことも、神様の知らなかったことは何一つない。それどころか、神様は私たち一人一人のために、神のみわざをあらわすために、神様は、私たちを通して、神様の力を証ししようと、私たちの人生に、日々の生活の中に、すべての事を備えて、導かれるお方です。ところが、神様を知らずに、ただ自分の力と、人の世の力、人の知恵、また人のわざによって、ここまで自分は生きて来た、多くの人々は思っています。言うならば、神なき世界。高ぶる者でしかないのであります。自分たちの誇りとし、自分たちの力を誇示する、そういう生き方のかつてはしていた者です。それゆえに、神様の恵みを受けることができなかった。神様が恵んで下さっていながら、それを

恵みと感じられない。そのように受け止めきれない。神様が与えて下さる恵みでありながら、「いや、こんなのは恵みであるはずがない。もっとこうでなきゃ、ああでなきゃ」とつぶやく。そこにはへりくだる、謙遜になる思いは、すでに消えています。「神様が恵んで下さるならば、もっとこうあってほしかった、こうでなければならぬ」と、その時すでに、自分の考えを義とし、正しいとし、自分の願っている事こそが、最善の道であると思っている。

ところが、自分のこれまでの人生を振り返ってみると、どれ一つとして、自分の思った通り、願った通り、すべてがそう進んできたわけではないばかりか、まさに想像しない、思いもしない、考えもしなかった道をたどって、今、ここに立っている。どんなことも、実は神様が、見えない力あるお方が、私たちのために備えて下さった、御手のわざであります。6節に「あなたがたは、神の力強い御手の下に自らを低くしなさい」と勧められています。そこで、自分の生きてきた過去を振り返って、「ああしておけばよかった、こうしておけばよかった」と、いろいろと悔やむ、あるいは、「ラッキー、良かった」と思うこともあるでしょう。いろいろな思いがあります。一つ一つ、どんなことも、これは神様からの恵みでしたと言うためには、自らが神様の前に、心を低くしなければ言えません。そうしないと、もっとこうだったら、もうちょっと私も頑張ればよかった、私が怠けたためにこうなってしまったと、勝手に、神様

抜きで、物事を考えようとする。その時、心は喜びを失い、力を失います。

私たちはいつもいろいろな事にあいます。これからもそうでしょう。思いがけない、計画になかった、予定になかった事態や事柄に出会う時に、そこでへりくだって、大能の御手のもとに自らを低くする。神様の力ある御手が働いていることを認める。これが謙遜になる、へりくだることです。与えられた事態がどんなであっても、感謝して受ける時、捨てるべきものはないとあるように、一つ一つを心から感謝していく。自分にとって不利な事、自分が嫌だと思ふ事であろうと、ここにも神様の何かご計画があり、みこころがあるのだと信じて、神様の見えない大能の力、絶大な力をもった神様の御手によって、今、この事が起こっていることを信じていく。そこに自分をゆだねるといふか、思いを捨てていくのです。これが恵みにあずかる秘訣であります。

「ヨハネによる福音書」9章1～7節を朗読。

これはイエス様が弟子たちと道を歩いてた時、一人の人に会います。彼は生まれながら目が見えない、盲人であったとあります。だから彼は一度として見たことがない。目で物を見ることはなかった。その様子を見て、弟子たちがイエス様に、彼がこんな不幸な目にあうのは、本人の罪なのか、それとも親の罪なのかと問います。その時、イエス様は親の罪でも、誰の罪でもない。ただ彼の上に、

神様のみわざがあらわれるためであると
おっしゃった。その後、6節からのところ
に、「地につばきをし、そのつばきで、ど
ろをつくり、そのどろを盲人の目に塗っ
て言われた」と。なんと、イエス様はこ
こで汚い話ですが、土を集めて、つばを
して、それでドロドロとねる。それを目
の見える人に塗る。どう考えても、こ
れはおかしい。もしその人が何をされて
いるか聞いたら、「そんな事、しないでく
れ。そもそも見えないのに、もっともっ
と見えなくなる。どうしてこんなことす
るのだろう」と思ったに違いない。へり
くだるといえるのは、ここです。大能の御
手の下に自らを低くする。イエス様がな
さるわざの中に、自分を徹底して委ねき
ってしまうこと、これがへりくだる。何
をされようと、自分にとって不利な事、
自分にとってマイナスと思えるような所
に置かれる。それを甘んじて受けていく。
これが謙遜、へりくだること。

私たちができないのはそこです。目に
泥を塗られる。「イエス様、そんなことし
ないで下さい。私はもっときれいな水で
洗ってほしい」。勝手に指示をする。だか
ら高ぶる者をしりぞけられるのです。こ
の時、この人は生まれつき盲人でしたか
ら、全く自分は何にも出来ないと知っ
ていました。イエス様の手で、ただなされ
るまま、どう取り扱われようと、まな板
の鯉、焼くなり、煮るなり、切るなり、
なんでもして下さいと、これが神様の
大能の手で自分を低くしていくことに他
ならない。まだ私たちは半煮えです。「神
様、どうぞよろしく」と言いながら、「神

様、次どうするの？」と戦々恐々、神様、下
手なことされたら困ると、そんな事を思
っているから、いつまで立っても謙遜に
なれない。だから恵みにあずかることが
できない。この人は、イエス様のされる
ままに自分を委ねたのです。つばきで泥
をつくり、その泥を盲人の目に塗って、
シロアムの池に行って洗いなさい。洗う
ぐらいなら、はじめからシロアムの池に
まっすぐ行けばいいわけでしょう。イエ
ス様のつばに、霊験あらたかな効能があ
ったわけではありません。イエス様は人
の子として生れなされた。私たちと同じ
です。皆さんのつばでも同じことです。

これは、私たちに、今もイエス様がし
て下さる事柄であります。いくらお祈り
しても、事態が混乱して、思い通りにい
かない。考え通りにいかない。どうして
でしょうかと、憤慨する。実は、あなた
が、その中にとどまることを神様は求め
ておられる。「そうなんですか。こん
な私は辛くて、苦しくて、たまりません。
いつまでこんな事をしておかなければな
らないのですか」。神様がせよとおっしゃ
られること。まさに、そこが目に泥を塗
られている状態です。もう一度、自分が
どんなに高慢な者であるかを振り返って
おきたい。神様のなさるわざでありなが
ら、あれは良い、これは嫌、これは良し、
これは嫌な事と、自分で振り分けている。
そうである限り、神様の恵みにあずかる
ことができない。目に泥を塗られようと、
塗ったあげく、シロアムに行って洗えと
言われようと、シロアムの池が特別な池
であったか分かりませんが、普通の、生

活用水を汲むところであったと思いますが、そこで洗うのです。そうした時に、どうなったか。

7 節に、『シロアムの池に行って洗いなさい』。そこで彼は言って洗った。そして見えるようになって、帰っていった。」その時、彼は目が開かれ、見えるようになって、帰っていくのです。今、自分が受けている事態や事柄、何をもって泥を塗られているのでしょうか。「あれは嫌だな、こんなことになって、いくら年を取ったって、こんなことになるなんて、ちょっとおかしいじゃないか」。

福岡にいらっしゃる一人の兄弟、九十歳になられた。「先生、最近、朝起きると、どうも体がすっきりしない。どこか病気があると思いますので、病院に行こうと思いますので、お祈りして下さい」と言われる。「いや、それは年でしょう」と言いたかったのですが、本人は真剣に自分は病気があると思っていますから、「そうですか。じゃあ、一度、検査を受けてみたらどうでしょう。お祈りしましょう」と、そこでお祈りしました。その日、病院に行って、次の日、来られて、「先生、もう憤慨しました。医者はいろいろ調べたあげく、どこも悪いところはないと言います。あれはやぶ医者です」。「ああ、そう。それで体調はどうですか」。「やっぱりきつい」。そこで神様は「今休め」とおっしゃる、「横になれ」とおっしゃるならば、横になればよい。「立て」と言われれば、立てばよい。ところが、そこで「ああじゃない、こうじゃない」とつぶやく。

大能の手の下に自らを低くする。低くすると、言葉だけ知っていて、実際はどういう事をするか、まさにそういう、今、受けている事自体が、神様からであって、それが私の利益となろうと、不利になろうと、好きな事であろうと、嫌いな事であろうと、いずれにせよ、今、神様が私にそれを与えて下さっている。その事を認めることが、大能の手の下に自ら低くすることです。幸いに、生れながら目の見えなかったこの人は、イエス様の手に一切を委ねました。なされるわざのどんなことも、「いや、それはやめて下さい。イエス様、これから何をしようとするのですか。ちょっと前もって、こっちの許可を受けてから、して下さい」、そんなことを言っている限り、恵みにあずかることができない。これは大原則です。

「ヨハネによる福音書」2 章 1～11 節を朗読。

これはカナの村での結婚式です。祝宴の最中に、ぶどう酒がなくなった。思いがけない来客であったと思います。マリヤさんは急いでイエス様のところへきて、「ぶどう酒がなくなりました」と伝える。イエス様は「わたしと、なんの係わりがあるか」とえらく冷たく言いますけれども、その後、マリヤさんは 5 節「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい」と、そこにいた僕たちに「イエス様がおっしゃることはなんでもして下さい」と言い置いて、その場を去っていきます。その後、6 節以下に、

ユダヤ人のきよめのならわしに従って、石の大きな水がめが置いてあった。お客さんが来ているわけですから、もう空っぽになっています。その水がめに、「かめに水をいっぱい入れなさい」。彼らは、今更、何のために入れるのか、不思議に思ったと思います。しかも水をくむというのは、簡単なわざではありません。労力が必要です。もし私たちがそんなことを頼まれたら、「神様、どうして私がしなければならない。今になってこんな事、水をくんだって、使いようがない。そもそもどういう意図ですか」と、根掘り葉掘り聞くでしょう。そういうことに疑問を持ち始めたら、へりくだった者とは言えません。大能の手、神様の絶大な力のもとに、自分をむなしくする。何をされようと、今、ここに神様が働いていらっしゃる。この僕たちは、それを知っていたか分かりませんが、とにかくマリヤさんから言われた通り、どんな事でも、どんな理不尽な事だろうと、言われた通りしなければならないと思っていた。それで水をくみました。

くみ終わったと思いきや、そこから桶一杯、水をくんで、料理頭に持って行けと言われる。これだって、実にまわりくどいと言いますか、損な道であります。そんなことしないで、もっと合理的に、スパッと、井戸から必要な分だけ、くんで持って行けば、早く事は終り、済んだわけですが、どうしてそんな事をしなければならない。ここが、神様が私たちを試みておられる時です。どこまで神様の大能の御手を信じて、自分をむなしくし

て、徹底しきっていくか。これは日々の生活の中でも、私たちに問いかけられます。いろいろな思いがけない事、辛い事や悲しい事、痛い事、いろいろな事態が起こります。どうしてと、つい悶々と思います。心で悩みます。その時です、これもまた神様が、私には分からないが、深いご計画をもって、私のために何か事をしようとしておられる。私と言うよりも、この悩みを通して、神様が栄光をあらわそうとされているから、そこで大能の手の下に自分を低くする。ここが神様の祝福と恵みにあずかる秘訣であります。

この時、僕たちは言われる通りに、わざわざ水をくんで、桶に入れて、それを料理頭のところに持って行きました。行ってみたら、どうですか。その水が、最高の品質の芳醇なぶどう酒に変わっていた。ぶどうを収穫し、何年も寝かせて、熟成させて、おいしいぶどう酒をつくるのですが、そんな時間は何もない。くんで、入れて、それをとって、持って行く。その瞬間に、神様が大能の力をもって水をぶどう酒に変える。9節の中ほどに、「水をくんだ僕たちは知っていた」と、それがどこからきたのか、僕たちが一番驚いたと思います。自分たちがくんできたのは、あの水じゃないか。それがぶどう酒に変わる。この水がぶどう酒に変わる奇跡を起こしたのは何であったか、僕たちの謙遜と従順でしょう。その置かれたところ、言われたところ、せよと言われること、それをひとつひとつ甘んじて、へりくだって、受けていく。そこに神様の大能の力が働いていることを、私たちは

知っているわけでありませう。神様が備えて下さるわざがあり、私たちを通してなそうとすることがある。そこを信じていくのです。

時に神様がなさることは、私たちの合理的な考えとは相いれない。むだの多い事、時には支離滅裂、わけが分からんということが多々あります。そこでこそ、自らを低くする。というのは、そういう事になると、人は自分の考え、人間は非常に賢いものですから、合理的に考える。理屈があうことばかりを求めます。ところが神様のわざは、人の理屈を超える。今、私はこういう状況だから、あの人の事、この人の事、周囲の経験してきた人たちを見て、ああなるに違いない。だから私もこうなるかなと、身近な事例に自分を当てはめてみて、考え、想像します。しかし、決してそうはならない。神様は、一人一人に手作りの人生を与えて下さる。

そこで私たちのなす事は何か。大能の手の下に、自らを低くする。神様の御手のわざに自分をしっかりと委ねて、今、この瞬間も、神様が私を握っていて下さる。私の日々の生活、一つ一つの中にわざをすすめておられるのですと、認めて、信じて、感謝して受けていく。たとえそれが辛くても、苦しくても、どんな問題であろうと、大丈夫、主がここに働いて下さっているからですと、大能の手の下に自らを低くしていく。

「ペテロの第一の手紙」5章に、「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下

に、自らを低くしなさい。時が来れば、神はあなたがたを高くして下さるであらう」と、神様が備えられた時が来れば、神はあなたがたを高くして、神様の栄光をあらわして下さる。あの目の見えなかった人、生まれた時から盲人であった人、その人が神様の定められた時が来て、はじめてイエス様に出会い、イエス様のなさるわざに、自分を委ねきった時、神様は時を定めて、驚くべきことをして下さる。今、私たちに対しても、神様はそういうみこころをもって臨んで下さるのですから、目の前のいろいろなことに振り回されて、周囲の事を見、ああなるか、こうなるかと思ひ煩うのではなくて、ここにも、神様が私のために備えて下さる道があることを信じ、全能者の力がそこに働いていることを信じて、主よ、どうぞ、みこころのままにと、自分を低くして、謙遜になって、主のなさるわざを、甘んじて受けていこうではありませんか。そこに神様は必ず答えて下さいます。「時が来れば、神はあなたがたを高くして下さる」、どうぞ、神様のなさるわざを体験する、味わう、この地上の旅路でありたいと思います。

ご一緒にお祈りを致しましょう。